特別寄稿

十和田神社について

佐野駒三郎

十和田神社は主として山で生活している村の人々が信仰しているもので、嘉瀬とは少し縁遠いが、喜良市では昔から（おそらく江戸時代から？）信仰している神社です。

五月の初め、喜良市の上派立に大きな幟りが二本立つので、今日は十和田様とわかるのです。昔は桜田以北、旧嘉瀬、旧金木及び西郡稲垣及び牛潟までの範囲の信仰のある人々が集まって来ます。今嘉瀬では十和田様、お参りした人は多分いないのではないかと思います。

当日は昔のトロッコ列車に人があふれる程乗ってお参りしたものです。十和田様へお参りしますと、別当と云って神官の代理する人がいます。大体喜良市上派立の町内会長さんがなっている様です。その外五・六人の役員が居て手伝いをしている様です。

まず神社へお参りして、別当からお札を頂き、裏の池へ参ります。池の樹上には北限の天然記念物のモリアオガエルが、白い卵をたくさんつけています。間違なく日本で最北のモリアオガエルです。

そして池の中には三椒カジカの卵がたくさんあります。其所で別当から頂いたお札でサンゴを打ち、次に三椒カジカの卵を見て、両方併せて今年の稲作を占うのです。それでお参りが終りとなり、池の廻りで、家で作って来た料理で一杯のみ、にぎやかに楽しんで、帰りに十二本ヤスへお参りして家路につくと言った所で終りです。

私がお参りした時は丁度終戦後でしたが、当時の別当は上派立の伊丸岡政次郎さんでした。その外五・六人小田川の人も居たし、『先生いい所へ来た』と言ってたくさんご馳走になった記憶があります。北限の天然記念物のモリアオガエルは嘉瀬の三左エ門溜池の奥にもいることをつけ加えて終ります。

嘉瀬物語り

小田川去来

山中長三郎

第一話、蟹コ

冷水町の小田川の南沿いに、我が家の本家がありました。「現在山中文蔵宅」当時は曲りくねった小田川は土堤らしきものはなく、浅瀬あり、深淵あり、川の流れも軒先を流れ、本家では「マス魚」を捕え、我が家に分けてくれたこともあります。

その頃は、たまに村人が「マス」を捕えた話しが聞かされる。

「小田川山」空沼、奥内、堤沢、九兵衛、金兵衛と続いているが、この小田川の源は、魔の岳で、標高三五二米の頂上は、青森市、五所川原市、金木町の三境界になっている。

つまり水ヶ沢の終点である。この水ヶ沢を下ると、右は旧喜良市の小田川領で、左が旧嘉瀬領になる。

小田川山は、空沼、奥内と続いて、嘉瀬山は、黒星（クロボシ）沢、大典、小典沢と続いて、流れがだんだん大きくなって、小田川山は、金山（カネヤマ）沢、蛇沢で、嘉瀬山は、キリガイ沢から、カバタナガレに沿って、小田川の流れは喜良市から嘉瀬を通り、最終点、駒留地区に至り約三十キロ流れて十川で合流され、二キロほど流れて岩木川に出て十三湖にと流れ着き、水戸口より日本海に注ぐ。

私は、今日まで「先祖代々も含む」、小田川流水で田を作り、その水で育った、お米を炊く薪も、冬の暖を取る薪も、小田川の山々の樹木である。

旧嘉瀬村に森林組合があり、村人の大方の家が組合に入り毎年のごとく農閉期になると小田川山に、薪切に山に行く。

ひば木の枝は一品の火力の強い薪であると云う。嘉瀬の本町、小倉豆腐店のご主人が油揚げ豆腐、造りは火力の勝負とであるといわれ、ひば枝の薪を高く買ってくれることもあった。

ひば枝の薪切り場所からは四、五本の丸太も取れる、年々丸太を貯え「おもな柱は買う」家を建築し、又物置小屋も造っている。

山菜を取っては旬物を味わう、長い年月の生活である。

小田川流域の数々の恵を与えてくれた山々に感謝いたします。戦後、十三港の水戸口に夜中になると川蟹の群が現われる噂が

あり、ある晩、友人と二人で水戸口に行くと、大きなブロックの水際をぞろぞろ歩き渡っている。日本海岸である、蟹は何処に行くのだろうか。蟹を素手で捕え「藁で縦七十センチ、横五十センチに編んだ袋」カマスに満ぱいに近い大漁に喜んで、家に帰り食して見ると味はさぱり良くありませんでした。

川蟹とは幼年の頃よりのお付き合いしている、四ツ年上の兄はよく蟹を漁り、大漁の時はよく、蟹のハタキのナベ汁を食べたおいしい味は忘られぬ。

子供の頃は先輩より蟹網の編み方を習い蟹釣り場もあたいてくれる、奴橋を中心にして、東二百メートル、西八幡宮近くまで畑中の蟹漁の縄張りである。この小田川で漁った蟹には十三湖の水戸口の蟹は色艶味、共に及びません。又時々下流の十川にも蟹漁に行きましたが、色は黒く、艶も味、小田川の蟹には一段と劣ります。

さほどの距離もないが、環境のせいだろうか。先輩等の申すには蟹は季節、季節により川を登り降りの習性があるといわれる。小田川上流の湯の沢地蔵堂裏の川で大きな蟹を捕えたこともあります。又昔小田川改修工事中に雨が降り水嵩が上り工事のために川巾が急に狭くなって、激流となっている。

激流の両岸の水際を次々と蟹が歩きつづいているのであります。海岸の十三湖の水戸口の蟹と小田川上流の湯の沢の蟹と同類だろうか、蟹の生態は私には全く知りません。

十三湖より小田川上流の湯の沢までおよそ三十キロの流れを横這に歩きながら辿り着けるだろうか。

第二話、川コ

小田川の川巾も狭く奴橋も又短く低い頃である。故山中信礼さんと二人で「今晩は月夜である、蟹が多く漁(ト)れる」と話し合いながら欄干に凭れていると、橋の下から微かに唄とも呻きとも付かぬ声がする。二人は驚きながら無我夢中で走り、若者の溜場に連絡する。二人の若者が走って行く。一人はいずみ電気のご主人だった故斉藤好六さんの若い頃である。

若者と共に奴橋の欄干に寄付くと又声が聞えた。さては何んだろうと云うことで付近の家々にも告げると、二三人の大人は懐中電灯を持ちながら急ぎ足でくる。全員が橋の右タモトの馬浴場の坂を下って、懐中電灯で照してよく見ると人が衣のままで水の中に座って何にかを誦えているのです。

若者が水に入り、その人を連れてくると顔見知りの四十歳、ほどの鍛冶町内の某さんであった。知人の一人が自分の家に連れて行き、着替えさせて某さん宅まで連れて行く。大分、酒に酔っていました。

何んのために水に入ったのかに就いて翌日の噂には二通りに分れている。一つは死ぬために川に入ったといわれ、もう一つは狐に化かされたと云う。死ぬためにあの浅い川に入ったのであれば、鍛冶町内の人であるから、もっと身近に深い溜池があるのに、わざわざ小田川にくることもあるまい。

川に入った某さんは風呂に入った気分になって歌を唄っていたのだといわれたという。

真実は一つ某さんの胸の中にあり、その後も誰れも知りませんでした。

第三話、銭コ

嘉瀬と金木の間の川コ
石コ流れて、木の葉コ沈む

鍛冶町、本町、後町、冷水、畑中、車町の各町内では家庭内の芥を奴橋の真上から川の中に捨てる習慣がついていた。

夏の或る日、鍛冶町内のS氏が芥を捨てた折に誤って五十銭玉も捨ててしまったと云いながら帰られた。奴橋で遊んでいた友人と二人は早速裸になり川に入り五十銭玉を探したが、なかなか見あたりません。

小田川より田圃に水引の時期であり水は少ないし、水も澄んでいる銀色に光る五十銭玉なら探し出せる筈である。子供には貰える金額ではない、幾ら捜すも見あたらぬS氏に編されたのかなと思ったが、諦めきれぬ。自棄(ヤケ)気になり砂利を手で掻きながら掬って見ると五十銭玉ではなく、赤銅色の一銭玉が手の掌に乗っている、又掬うと又乗っている。

友人も同じく拾う、日暮も近い二人は誰れにも此のことを云わぬ約束をして家に帰る。翌日も一銭玉が出る、掬う度に出る、偶(タマ)に大きな二銭玉も出るのである、S氏の失った五十銭玉は発見されませんが、そのことは、もうとっくに忘れている。

子供にとっては宝の川である。暫くすると二人、三人と友達が多くなる、その翌日は七、八人となったが、一銭玉、二銭玉がざくざく出て尽きない。四、五日たつと、子供の数もふえたが一銭玉、二銭玉は相変ず出るのである。「嘉瀬と金木の間の川コ　ゴミコ流れて銭コ沈む」何年の歳月によってこのように銭コ埋れたのだろう。

二銭玉の出る度に子供の喊声があがる。この事が何日続いただろう。或る日突然に他村の大人が三人現われて、砂石を掬う一式の道具と大きな磁石を用い、二日—三日で一銭玉も釘一本も残さず掬え取ってしまった。

奴橋に凭れ坊主刈の頭を並べた子供たちは銭コ消えた、キラキラ陽の光る川面の流れを見詰めるだけだった。

第四話、丸太コ

或る朝、畑中の国道は人声で騒がしい。国道に出て見ると、奴橋に人が群れをしている。若者は長柄のカギを肩にして手にロープを持ちながら、急ぎ足で歩いている。

私も奴橋に行く、人々の話しを総合すると、昨夜の雨が適度に降ったので嘉瀬の柾割業者は他の人の応援を受け柾を造る丸太を山より流し、この辺の土堤に拾い上げるとのことである。

大人の間を潜り込み前にでると、まさに濁流は激しく流れてくる。水嵩も増し、暫く時が立つにつれて濁流も緩かになって

きた、上流の方で、丸太が流れて来たよと甲高い声で呼ぶ人がいる。畑中の柾割業の故秋元亀吉氏である。嘉瀬本町第一消防団員の勇み肌であり、この日の指導者である。

小栗崎の橋と奴橋間の土堤を若者が奔走する、曲りくねる流れにより土堤岸に寄る丸太を引上げている。

それでも猶流れくる丸太には奴橋近くに、川の中に少し突き出た足場から中央を流れ来る丸太を長柄のカギで土堤に引き寄せる。奴橋にも中央に吊り足場のような足場があり、最後の丸太の拾い場である。誤ると濁流に転落の危険な仕事であります。

指示する秋元氏は甲高い声を張り上げて奔走している。今に思い出しても感激の一と時である。小田川山に軌道線の敷かれる以前は丸太流しの土場は「須崎正敏先輩のお話によると小畑の土場、小田川の土場、嘉瀬の八幡宮前の土場もあったといわれる」小田川終点にも土場があり、藩候時代には終点まで丸太を流して、飯詰川＝金木川からの流れた、丸太も選別され各筏に組み分けされ各方面に運搬されたと言う。

私は子供の頃に小田川終点近くの（通称お来場）田圃には父は馬と共に連れて行く。田圃の隣地に五町歩ほどの原野があり、以前はリンゴ畑であったといわれる。一日中、馬は草を喰み、私はリンゴ樹の切りあとの根から育つ芽に生る実、「リンゴサナス・リンゴの越小粒」を探しては食べながら黒の子犬と遊びまわる。

原野は藩候時代は丘であり、筏を組むに用いる質材と道具を入れる小屋と働く人の休み小屋でもあったと言い伝えがある。

幾度もの小田川―十川の改修工事に丘の土地を土堤に盛り、現在のように全面、田圃に耕されたのは終戦前後であります。

第五話、杖コ

昭和十一年に起きた、二・二六事件は陸軍、皇道派の青年将校は部下の兵卒の家庭はあまりにも貧しく、娘の身売りあり、借金あり、重病人あるも医者に見せられずの状況を兵卒の話しや手紙により知ることにより、庶民の窮迫の暮らしを憂えるがために昭和維新を目指したクーデターともいわれる。

将兵千五百名により政府首脳陣殺害される大事件である、このクーデターに関係された下士官、兵卒の多くは原隊に復帰されたが「青森県出身・野中四郎大尉」一三〇九年頃より蒙古来襲の戦に最高の巧名のある河野通有の家来河野大尉の二人は自決する、他の将校等、香田清貞、村中孝次、磯部浅一、安藤輝三、十七名の青年将校と反乱幇助したとされる北一輝、西田税が銃殺刑に処される。この事件後は統制派の軍により軍国主義へ進展されい行く。又昭和十年に天皇陛下の弟君であらせられる秩父宮様には弘前歩兵第三十一連隊長として着任されている。

青森歩兵第五連隊の末松太平、大岸頼好の二人の将校は昭和維新に深く関係されていたとされます。

当時弘前師団に入隊されていた嘉瀬村本町某氏の言うに師団内でも、今にも何処かで戦争が起きて出動しそうな風潮であっ

たと申されていました。昭和六年―十一年に亘り嘉瀬村より三十数名の娘の身売りが出たといわれます。

金木町修練農場に秩父宮様が来られ嘉瀬小学校の生徒として嘉瀬溜池の国道に列をなす、お迎えするも最敬礼にて頭は上げられず、姿は全く見られませんでした。

当時奴橋を往来され、現在姿の消えたのは軍隊と乞食である。

奴橋の欄干に凭れていると、晴れた日は必ずと言っていいほど、師団の軍隊が岩木山の麓、山田野で敵陣地と見立てたトーチカ「塹壕」を実弾による砲撃の練習で砲の音は奴橋まで聞こえてくる。

――軍も部隊をなす　嘉瀬―金木―中里―市浦―西郡車力方面に行き途中の各地の原野で練習を繰り返して最後は山田野の練習場で練習をして岩木山麓を巡り師団に帰るそうです。

昭和十二年に中華事変が起きると、ますます軍隊と乞食が頻に奴橋を渡るようになる。乞食も又北郡―西郡と門付けをして一巡しただろう。乞食の人では、心に影像に残っているのはシバタノスワとトトリケンの鴛鴦乞食である。

男トトリは全盲であり、女スワも半盲であります。スワはトトリの杖を引き、スワも又杖を突きながら歩く、野宿するだろう丸めた衣を背負っている。

二人で半人前の行動もできない、奴橋に来ると私も揶揄った子供の一人です。トトリの夫の杖を引き、スワも杖を突きながら歩く容姿は、村の虫祭り仮装・盆踊の仮装ともなりました。

私の家に遊びによく来るお婆さんの云うには、都会で水商売するスワと鳥取県の名家の生まれで都会の大学生の頃トトリの二人の馴れ初めであるといわれ、トトリの生家では二人のことを知る及んで勘気にふれトトリは生家に戻れぬ羽目となる。

貧しくとも二人は楽しく暮したが、トトリは全盲にスワは半盲となり都会での生活はならず、スワの生まれの津軽「木造」に来て乞食をするようになったといわれていた。

私の娘に木造町の人にシバタの存名を尋ねさせると、木造町の在にシバタの部落名が存在するといわれる。

それにしてもトトリケンとシバタスワの用いられ、二人の愛の染った夫婦杖は何処に果てたろう―

第五話、夢コ

今日は小田川沿に進み終点まで行く予定である。須崎先輩に小田川山の沢の名・山の略図を書いてもらっている、心強い。

奴橋を出発し喜良市の診田製材所の南側の道を通ると南側の山々は昔は嘉瀬村の多くの人々が柴刈に入ったと云う。

とくに春彼岸が訪れて田圃の雪が固く凍ると、早朝より起き人橇りを引き田圃の中を直線に山に向って通称の川端で柴を刈り、柴を橇に積み終えると、携帯した彼岸の団子を食べる雪の解ぬ間にと橇の列に加わる。橇の列は長く続き震えながら帰られたと、祖母より聞かされた。

昔、昔の嘉瀬の里もお爺さんは山に柴刈にお婆さんは小田川

の綺麗な水に足を入れ洗濯をしながら、上流より昔コの桃太郎のように「世の中の鬼退治してくれる」桃が流れて来るのを祈っていたのかも知れぬ。

一号橋――六号橋と渡ると右手に白岩が見え、左手の少し高い所は広い苗圃畑でありました。白岩を過ぎ門を曲って行くと広い土場があり、小田川のせせらぎて直ぐに手を洗える所もこの先は容易にない筈です。小田川の東側に半世紀前には、何棟もの屋根だけの小屋が立って、白石が積み上げられ粉にして中央方面に持って行ったという。

米の虫駆除・又は籾摺り、あるいは陶器造りに使用されたともいわれ定かではない。七号橋に行くと北の方に古い橋と湯の沢の地蔵堂に行ける旧林道がある。車を降りて一休みする。

半世紀前に旧林道を先輩の須崎さん、斉藤さん、山中さん、私と十人ほどで歩いて地蔵堂に行ったのを思い出す。

境内には二階建の家が二軒と風呂のある家もある。二階建の一軒に宿泊しながら各地の林道の整理仕事をした。当時は番人も参拝客も時々見られ、風呂を浴び日帰りしていました。

「第六集かたりべの山中日記に明治四十五年湯の沢地蔵堂に有志の旗寄進せりとあります」私の次女が三歳の時「昭和三十二年」皮膚病を患い祖母が背負ってお婆さん方四人ほどでお地蔵さんにお参詣しながら風呂に入ってくると大いに効力ありました。

猶地蔵堂の裏の川を渡り少し行った所から営林署より嘉瀬森林組合に払下されたひば木の枝は太く立派な薪であった。

各家の家族が総出で、薪を一本・二本を背負って旧林道を歩き七番橋の手前の軌道線まで運ばび苦労したことを思う。数年後にこの場所に苗木を植えるために行かれた、担当区指導員須崎先輩によると、そちこちに大きな切株のあるのに驚いたといわれる。身長百七十センチの須崎先輩が昼休みに切株の上に寝て足を伸して休むと頭も足も切株の端には届かなかったと申されていました。

「湯の沢地蔵尊と滝一帯は会長木村治利さんにより第四集かたりべに踏査紀行として詳しく著しています。」

岩石の断崖の道に入る八号橋の手前右の奥に白石の採集されている穴は昔は軌道線より見えていた。小田川の北側にも昔から洞窟があり人の住んだ気配すると云われ六十年前に洞窟に入った友人達の話しでは箱らしき腐敗物があったと云う。

小田川ダムに到着、堤高三十一M、長さ二百三十M、関係市町村・金木・五所川原・中里・市浦・利用面積は四千一百二十五ha。ダム概要を記す。

ダム南側―個人所有緑のひば森林は三十町歩とも四十町歩ともいわれてる。ダム建設の際に此の山と交換できる。ひば美林は金木営林署管内の山になく、交換することなく建設されたと云う。

或る年にカラ松の種子の不作のため営林署通達により種子採集するに現在薄市の所有であるダム南側のひば林に入って種子

取りをされましたが、ひば材の立派な森林に成長したのに感動されたといわれる。「須崎先輩より聞く」

この山は元嘉瀬後町山中家が藩侯の奨励により漆を植え、やがて明治政府となり、営林署より払い下げされたそうです。

半世紀前には小田川沿いを歩きますと漆木畑が見られ点々と漆木も並んでいたのである。畑で個人の所有になったのは、嘉瀬村女傑「山中家」が先頭になり政府、営林署との掛引の交渉により得えたといわれる。

須崎先輩からの略図を見ると、次は多々良沢になっているが昔の軌道線の跡はなく周囲の地形は全く解からぬ、戦時中は多々良の奥の方で石油のボーリングが始まり、ポンポンと音が山間に谺していた。小典、大典、惣次郎、猫右エ門、金兵ベェへと進む旧軌道線の終点はこの処かなと広い所に出て下車して小田川の浅瀬で手を洗い略図を広げると先は九兵士、堤沢、奥内とつづく車のメータは十五キロ走っている。何十年間も歩いていない道のりである。

半世紀前の立派なひば美林はもう見られない。昔の面影の薄れた道のりではあるが、戦争中と戦後にかけ毎年のごとく嘉瀬森林組合の一人として薪切に入った山々である。

須崎先輩によると造林で植えたのは成長の早い杉苗が多いが生命力の強いひばは将来的には津軽中山山脈は又日本三大ひば美林に復元するだろうと云う。

中国「支那」は万里の長城を築くレンガ造りと青銅器を造る鋳物「鉄を熔かして湯にする」ため樹木が多大に使用され、さしもの厖大に広い中国も樹木も少なくなり、朝鮮半島の樹木も切り裸山同然となる、中国、朝鮮の山は地質的にも「日本は雨期が多く地質も水保もよく樹木の成長も四十年立つと復元するといわれる」日本に比ると中国と朝鮮は復元に長年の歳月を要す、植林も思うように出来ない山が多いと云う。

そこで朝鮮の製鉄業者は樹木の多く有る日本に渡り武器と農具を造り、逆輸入もあったろうし、帰化人も多くなり、大和民族は俄かに発展され後に東北の蝦夷地に侵入するに至る。

猫右エ門―金兵ベェ―九兵士は昔は奥山である、薪切りするにも日帰りはできない、小屋泊となります。夏、秋の農閑期薪切り、冬は軌道線まで人橇で薪運搬をする。冬籠の物質は秋内に運んでおく。物を運ぶにも軌道車には顔見知りでないと乗せてもらえぬ、何キロもある軌道線を荷を背負って歩くしかないのである。山小屋は床は地面にひばの葉を敷きその上に藁を少し敷く明りはローソクと焚火である。

或る年、友人と二人で組んで同じ小屋に寝起したが、強風雨に雨は漏る、小屋は破れ何処も暗く、風雨と激しい音の夜であった。翌日友人は薪切り場所を私に譲り下山してしまった。

薪切り場は郡境の頂きまでで、他の人とは離れていた。隣地は、ひばの大木が欝蒼と茂っている。

須崎先輩が住宅質材を営林署より払い下を受けて切った大木は十三尺の長さ七本取りあとの柱の取れぬ細い部分も十三尺も

あったといわれています。

柱の取れる太さに成長するには百年—百五十年、立派な棟物や掛物は三百—四百年の歳月を要するといわれる。郡境の山奥の薪切の暮しは短期間ではあるが、急に古代人のまねごとである。冬山は秋に利用された小屋の材料と鍋釜、冬に使用する人橇り、他物も秋に山に運ばれたものと木の根元に整理して冬に訪れた時の目印に幹の上の方に何かを結ぶ。冬に堀り返して又小屋造りするのである。冬山の暮しは広さ十三尺四方、深さも十三尺ほど雪穴を掘り、屋根は藁で編んだ「ノマ」をのせて、雨雪を防ぐ。側面は材料の不足の時は雪肌のままである、夜中は薄火にするも火は消さない。側面の雪は融けながらも十五日—二十日間は屋根を支えくれるのである。

夜中一人で小屋で床に付くと、どんな些細な音も聞こえてくる。

静かな夜、青森発夜十二時、函館行の連絡船の汽笛、ボウーと云う音を聞くと、共に昔人と霊鳥の夢を見ていました。

私は大和時代の人となって、昔の善知鳥の小祠に浜里の代表として他の代表の人々と祈禱している。

今年こそ霊鳥を追払わねばならない、年々歳々漁撈時期に大群となって浜に飛来し、海中の魚も干魚も荒されるのである。

今年は霊鳥を追払うか、浜里を離れ行くかの接迫にきていた。

いよいよ、霊鳥の飛来の日である。

霊鳥であろと、神鳥であろうが、仇する鳥は討つべし。

浜人は唯々、神に祈っていたのである。近年になって都から一人の貴人が配流されてきた。彼れの名は烏頭安方といい、中納言の身分であったが、允恭天皇「十九代」の勅勘を受けて、その子は遠く南の果てに安方は北の果ての外ヶ浜に流罪となった。安方は浜人たちにさまざまなことを教えていたので、里人は安方を深く尊敬している。

夕刻になると外ヶ浜の上空は何千羽、何万羽のこれまでにない大群が上空で舞っているのである。祈禱していた人々も神への大願も効もなくこの大多数の群れにおろおろするばかりであります。

浜の波際に立つ、鳥の大群を見つめている者がいた。烏頭の安方さまである。頃合の時刻を待っていたのである。上空の鳥の群れが森の塒に沈む。頃合いよし、予ねてより打ち合せ通り、松明に火を付け合図を送る。すると若い衆は手に手に松明を輝かせて走り行く。この一年間、外ヶ浜の里々の漁師に浜に出来るだけの薪盛を、数多く造るように伝達している。

若者の松明は次々と薪盛に火を付けたのである、それを合図に遠くの浜里の薪盛も然え上り空一面に炎が登る、霊鳥の大群はボーウと云う轟音が響き「連絡船の汽笛に似る」何処にか消え去って復び外ヶ浜には霊鳥は現れませんでした。

里の人々は器々安方さまを尊敬するも、いつまで経っても赦免にならず。或る日ふっとした風邪がもとで重い病となり、とうとうとこの地に相果てたのである。浜人は悲しみと尊敬により神に祠ることを感之しも、なしろ大和朝延の罪人である。

祭祠も出来ず、里の小祠を烏頭安方に因み、善知鳥と称して敬い身近に多く住む鳥をも善知鳥と名付けて親しみ、魚の往来には安方の立った波際に手を合掌するのである。此れは私の薪切の山小屋で見た夢。善知鳥神社、伝説物語りでありません。

さて九兵士、奥内と坂道を登ると舗装路に出た一安心である。油川方面に暫く行くと陸奥湾の全景が一望である。青森市も遙かに見える。望遠鏡でもあれば、善知鳥神社も見られるかなと思うほど晴れている。

善知鳥伝説の物語りは、はるか室町時代の能に作られ京都では現在も演じられているといわれる。

昭和十三年に棟方志功により名作、鷺畷の柵「善知鳥村」彫って官展始って以来板画ては最初の特選であったといわれる。

善知鳥の謠の一節、「能」

これは諸国一見の僧にて侯、
われはまだ陸奥外ヶ浜を見侯ふほどに、
あわれやげにいにしへは、
さしも契りし妻や子も、
今はうとうの音に泣きて、
やすかたの鳥の安からずや……

小田川去来をかくにあたり須崎先輩のご指導ありがとうございます。

平成十年三月

津軽弁　村の笑い話コ

わら焼き　誤解（コーガイ）

秋の夕暮れ、わら焼きの炎が天を焦がすように空を赤く染めていた。

ようやく燃えつきたわら灰を眺めていた秋男は、新妻のひろみに「ぼおーと見れば黒いドモ、分けて見ダケァ、中は赤クテ、指コへでミダケァ、生温かいモノ、ナーニ」と尋ねた。

ひろみ、カツンと自分の肩を秋男にぶっつけ、鼻をならして、秋男の耳元にささやいた。「エッチ、アノ色コ、黒デネエ、グレーダデバ」

（森平）